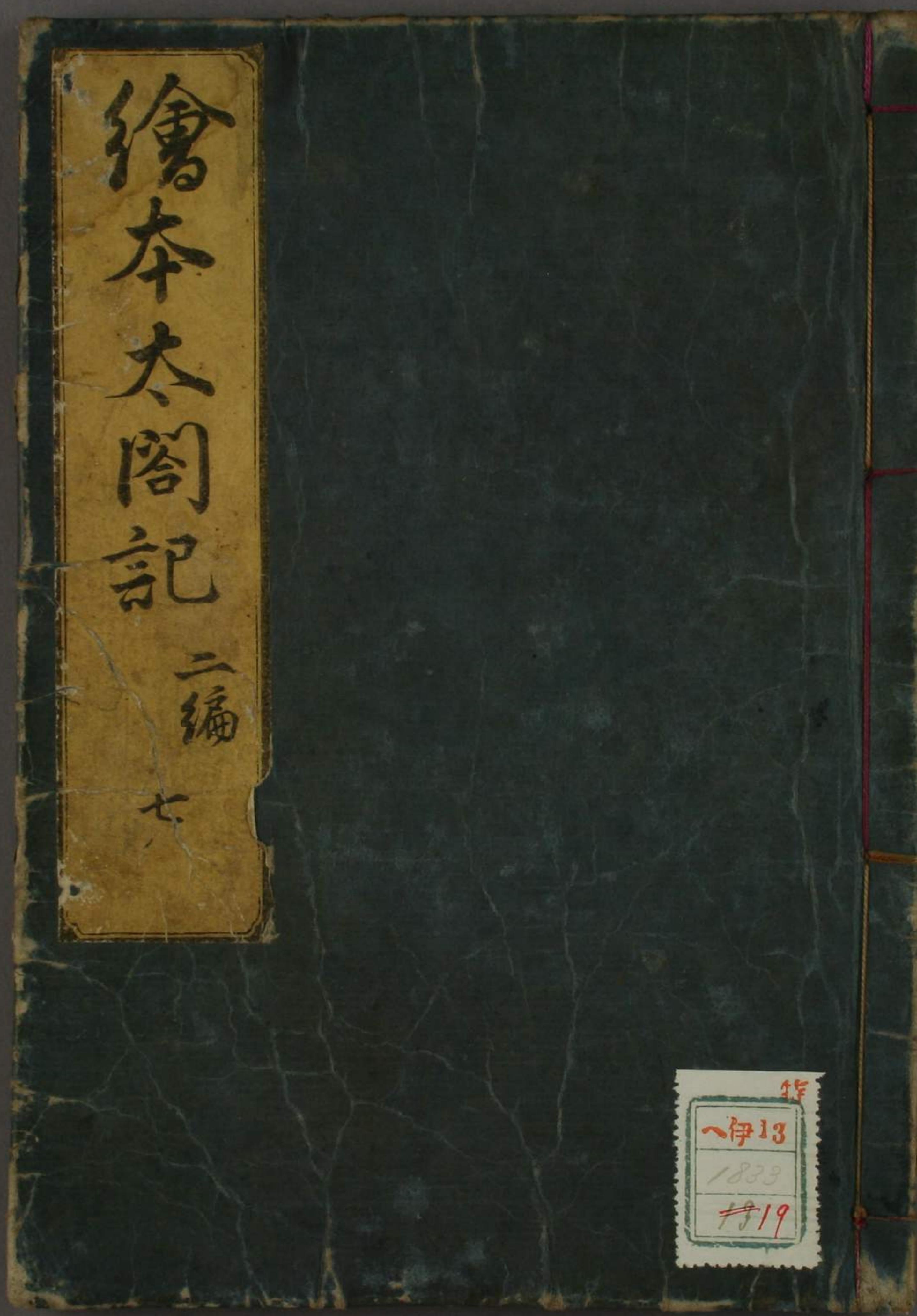


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN TAJIMA





18
1833
19

繪本古圖記二篇卷之七

目録

義景令義波奪妻

赤波九郎兵衛降系信長

虎渕系山合戰

鶴倉義系因祚山退陣也

繪
會
本
古
圖
記
二
篇
卷
之
七

まへるところうどんとくばりの
義系今弟波音立安

賢を賢として之に舊よとて聖人の教(アラタナリ)初。倉義系(カニイシイ)の事
長政がたのまことにさうひ後兵(アラハシヒ)を出さんと用意(アラハシヒ)。不思議の強勢
生れてから出陣(アラハシヒ)延(アラハシヒ)。其の始終(アラハシヒ)を易(アラハシヒ)く。淺羽山の城主(アラハシヒ)
義(アラハシヒ)高(アラハシヒ)湯(アラハシヒ)良(アラハシヒ)の後(アラハシヒ)不(アラハシヒ)久(アラハシヒ)に身(アラハシヒ)を失(アラハシヒ)。此(アラハシヒ)に對(アラハシヒ)食(アラハシヒ)たよ
て義系(アラハシヒ)の扶助(アラハシヒ)を得て(アラハシヒ)殺害(アラハシヒ)と居(アラハシヒ)。居(アラハシヒ)しがたく付(アラハシヒ)義系(アラハシヒ)と酒宴(アラハシヒ)
席(アラハシヒ)は龍(アラハシヒ)與(アラハシヒ)やうへし燐(アラハシヒ)や天下(アラハシヒ)安寧(アラハシヒ)の爲(アラハシヒ)あり。圍(アラハシヒ)ま(アラハシヒ)れを志(アラハシヒ)せた
まや義系(アラハシヒ)もうきて、我(アラハシヒ)城(アラハシヒ)やよきをあ(アラハシヒ)い。とも見え(アラハシヒ)て、之(アラハシヒ)下(アラハシヒ)の
見(アラハシヒ)ゆ(アラハシヒ)ちよどく。龍(アラハシヒ)此(アラハシヒ)頃(アラハシヒ)改(アラハシヒ)め我(アラハシヒ)ま。奉(アラハシヒ)老(アラハシヒ)まゆゆ(アラハシヒ)眼
既(アラハシヒ)明(アラハシヒ)らうといふぞ。又(アラハシヒ)遙(アラハシヒ)アキヤマの、城中(アラハシヒ)工(アラハシヒ)の邊(アラハシヒ)を通(アラハシヒ)し

真言一集卷之二

鈔食義系家期

あきらけ ゆうぢんらうじト
朝倉家勇臣等討記

義婦斷命而全操

信長大軍圍小谷城



又至淮作の多居と並びてさかねて三十ぞうの女つるよひをもと
先緒とあづけのくちはし女のまの十ぞうなる小籬よめる狭の小枝
をわてよ(ぬる其姿此處の人へ思ひれど我一同彼女を見しより心神
恍惚とあくよをすげにいふる者の娘ちうりんきうまやーと
語りぬきば義系太よ與て入室に我城中の女ちうせば其女と爲
紀一呉下よりとく枕席の傍とせんへんとく龍與院を席み
付候ふと慈氏尉と義系耶尉よ人をきらせ其女が親を爲向
又如く後弛ゆうほ弱ちよ女ひ赤波九郎兵房が細下の室種大母
懶をもとや者のむららかく城中第一の美女うそひとて後義系西
又大財産をもつをじよせまろくのは物語り女を差出しきに象
巖重に金丸ば地をの長う委細承知まほあし娘義今朝う

の心増すてお跡まうへらればよ奈波守山よ御官仕は指出ヤビ
と言ひて退きうけ地をつが女船をみくび破て去年もう細下
赤波九郎兵房深く哀ちひ細下の足腫なれり地よ地をもつて
るりを傳りて思ひりのとはとくの松山浪もことじと行幸ひそ
數りうる私親地ちうも細下の赤波うちがどうへぬしござひにまう
に其まうにじよううが今度大き義系の命と蒙り承後龍與が妻
れて安養(仕)とせんと細下赤波九郎兵房が許よむり異よけうの
次第を物語りければ赤波たに夢れひりせんと心を若しもろが良る
てやぶふへえ来汝が女と我が浦に宿ひゆるを大守義系もろし
石ざるを歎美が聲ひよほでにをとて食し経てと是へて、我物の教よ



あはとゞり人並の軍功を積み勧倉かうそ一方のお城も余すら
引く某をしべ敗団の弱ね我團の食害する姫良といひて見習ひ
きゆるらじ女を生ひて秋圓守よけ次第をや上明ふ我と
蓬へ毛とて其候登城へ近ちの士をひてやうる火把煙をの安が被
身のゆをみて甚にれらまひ役よ組下の足腰とせばがれり
なうびくま婦の娘約枝へ至りども其ゆを大字へよだれ
にしひ女をみて女後龍興が妻よ指出へりとの御後臣が面目を參
西へありし春暮をみて龍興が急幕を制へ止めよりのちに居る
ま婦をみて恐れ難ひきんと御内臣へされが勧倉義系をよ
嫁りお波がや來こそ言語曰あ悪きゆう我幕下みある大小の士
婚固をうなよ奉り我よ活へ而後よ婦妻の縁が免むお波私よ

太波が女よ通ド我をうて龍興よ信條をえせうんとく其ゆを
後もひよび彼女をよ今引連来ふほじ是故よお波太波も討
捨ト力者三千余人太波が家に押よせよとひくとゆりく女を引くと
ゆうたるべ姓をうて君令辟うちゆを得どお波ハ源くげゆを恨え
の義うハ女後龍興が恋慕ようかくたうりお波ハ龍興一刀よ切捨この
恨をそらさんひと牙を噛でぞ憤りタ

お波九郎兵清隊系信長

うねよお波九郎兵清ハ女後龍興を深く恨み時日を過ぎて討罪
使とおを便ひ居てうなれど龍興もお波がお波是未よく坐固よ
用心をうそあまし不善ためを仕出して討換じてひを念じて同乗
し前まぐひひひ朋輩よ富田翁の郎増井甚内毛若猪之助

三人を拓き密ひそかに始終をねざうる龍真を討へき計やみと戸ひとが
三人をもしくするは足下を反覆龍真のことを恨み落す未其の程りくほ
かに國守義系は疎弱すと國の枝石する足下をしてその國の將を
反覆真よ及ばしむことまゝ義系が浮うてつゝ當家のひとまと
兄弟よ忠臣へ退き倭居へ徑よう経よハ信長のぬよ滅せんゆ日と
ぞくわびしきあたのうき大ねよ仕へゆて食とえんようは寔を去
て他國まきうべ信長は障みて小田のをひ備て反覆を討んよ何の難き
の歴や是下心を空へ玉て我くも復よけ國をもへととく若波と
をこまぬきて又よ河代義セヨラアヒ池田隼人とも者乞も若波と
心合ふ朋友をじしがあへてしく馳来う若波を拓きてヤラハ國守
義系反覆龍真が進めようう足下と石夢殊せんよ某と今此と

承うれし心かの情狀のぐけりを告もじしむよくい國を去ては命令を
全く止とひふ若波太きに驚きまゝ人義系とやどまで某を悪ミ反
覆を隠遁へ安らぬみにこそ仕られ謹で足下の河と改ひ他國よ
きく身を保くまじとつも終うごく小國守義系復者をみて若波と
拓き軍の證とづき旨を聞即刻登城つてがたはし安(されば若波九
郎兵房夢)よ堪み復者に立ち男と見てうふせ人の眼を見ひと
妻を励へ罵るハ海傍うかく我易るゆを明みやび國守の我と若
きの軍のを被もてへば(だ)返て我を殺さんとのゆなほ今仍うと
やのちうが一刀又は殺しと云ふ(だ)ぬき心りと押してされば彼は
者大きに恐れせりゆき義系龍真両ね計をうま拓き勢力者をみて殺
えんを死へと委細奥よ語りぬきがお波夢(まとも)と結び先其程



者ハ一刀ニ突駆。相諸士ニ向ひ今大の身の上にせらる。一魁。小團
み足を止めし小田の陣中。又深活即ち溝門。我とえ来因。わいば彼よた
うて信長。又津糸良。奇も法。よう我を易て。まゝ経へとい捨て近
に路にして走り。又富田增井毛谷池田の家人計を定め急ぎて守義京
の本に出で。次へ後ひ。又。若波九郎。急溝眼。をつ。只一人。隊外。まゝ出
あらじ。其さま不審。又波が如に。ひて刀ひ。殺す。内假者よ。まつて。何某と
一刀。指殺。其手。逐電。や。と。まひ。未遠く。引。く。以。ば。我。に。人
を。勢を。引。し。諸方の。弓箭。ひ。を。ほ。追。ひ。け。擯。捕。や。き。ろ。討。ひ。と。免
ト。ト。も。し。と。や。そ。れ。じ。義。京。さ。き。に。參。り。要。き。不。波。が。ふ。ま。ひ。る。手。ミ。エ
組。セ。毛。筋。を。引。し。序。附。も。ま。く。捕。へ。來。れ。と。毛。谷。に。人。一。日。よ。最。後。退。き。て
用。意。と。ほ。と。の。勢。部。食。百。余。人。と。揉。よ。り。ん。で。退。う。る。

虎渕若山合戦

若波九郎兵溝は早。ゆ。往。せ。る。不。急。ぎ。三。里。計。も。走。り。ま。る。小。隊。うち。討。ひ。乃。勢
に。又。百。斗。石。烟。を。立。て。逃。走。り。若。波。今。り。そ。す。で。之。向。ひ。討。ひ。准。か。る。人。指。遣
く。死。せ。ん。の。こ。一。村。萬。じ。森。の。内。よ。家。を。め。び。ち。刀。援。そ。び。行。居。く。る。殺。る
く。近。付。逃。人の。軍。勢。生。先。よ。進。み。走。り。小。田。跡。六。前。增。井。甚。房。毛。谷。猪。之。助
池。田。隼。人の。に。人。を。若。波。九。郎。兵。溝。大。き。と。怒。り。討。ひ。に。向。ひ。太。ね。り。傷。者。か。ると。か
ひ。よ。富。田。增。井。甚。房。大。き。と。怒。り。討。ひ。に。向。ひ。太。ね。り。傷。者。か。ると。か
内。うち。踊。出。一。文。字。に。切。て。う。し。げ。に。人。の。軍。ね。等。く。馬。よ。り。走。り。我。謀。を
ひ。て。太。守。を。逃。り。討。ひ。公。乞。更。向。ひ。し。り。是。下。と。共。小。田。翁。に。津。り。大
業。公。よ。ん。わ。く。一。足。も。よ。く。信。長。の。陣。不。急。く。し。と。馬。を。引。せ。て。若。波。を
素。せ。一。系。に。延。出。せ。ば。若。波。大。き。と。お。び。我。運。令。未。盡。ど。と。が。る。小。此。軍。勢。と

得て今まの討を向ひてもお破て退んよ何の難きのみぎやと
勇みそんでに忍じてまうけつ附又内年十月六日勝井俊和守長政又
は金秀の軍兵不障小田の豆湯にこまゝる虎津木の壁をひ押す
武と戦と始らる木下夏吉即秀吉懸門を押開き勢三又八百餘人
一目よ切て出でと喚て前後左右に薙ぬしが勝井勢に度詰ひて引み行
寔み勝井の旗本より繙よ威よ禮よ席よ席の角の前立むく虎を運ぶ
う毛の馬よ膳を捨て捨て近寄り武者七八騎矢盾に突伏
れも進んで戦てまう木下の旗本より行切祐作頃し出務を合せ勇を
振ふて戦ひて勝負のきをよからず通志市松徳て近寄り模倣う寔
てうなび彼武者にも腰をた右に當て精神性加フ危きのまく勵みを
じも勇まにほれずに行切祐作の両雄汗をもじて戦ふあつ候際

は敵易の武者ならびとあ陣吟成聲にて見物を加夏虎之助が良等本
村又秀井と太九郎飯田是兵房一時よ切て入彼武者と討てましが今り叶
キドトや思ひそむひを向く遂て木下の通志市松徳をうけて戦ひて
名へふと向ひ彼武者馬の首を以て通志内と諱す木下夏吉即遙
よこれをひて急よ令を仰ぐ彼武者を退へて寔よめひてあ陣戦
を止め縛を以て士卒と收め皆陣く列入公私

鶴倉義京因祚山退陣

天正元年十月八日鶴倉義京源と皆陣の侵へきて自ら三万余兵と
主座山長政と力のうち源内源と源と皆陣を内十日因祚とて陣と敵
幕下のね草ハ堵義山余源庄本を追ひ陣遠別よ大嶽の岩山に三重
の曲輪を構へ巖寺よ備今れば鶴倉又よよ力を以て合戦の用意



とまへて信長御乞を又あひ初食家陣系のねを波九郎兵衛當田
糸六節毛谷猪之助増井基内池田隼人余に三より金人を属マシ大山城
の城を表させ爲へば城の三の曲輪燒尾の構を守る大内氏波又對馬主
とつ者と一がも波多田増井を敵方と降進表考來りとて一けり
何とまへ然ひ始終利みほと思ひ立すや忽小田よ降進
せ故を計入坐ヨニの曲輪より攻め候はれに鐵舟守又因宗女正子籠居
て防ぎ武んとどうあれ浩の丸よ籠うたら小林在房門脇義部率浦
の西光院寺忽に度して城門を開き後より二の丸よ表アモ表アモとつよ
ゆうて城ふやぐれおはみ田が軍勢前後の敵を防ぐ事不能迄この
如し小谷の城へよたり安久サヒト大嶽一時よ落城し危が信長弟
波多を表く称す其勢をみて中嶽越左衛門五郎承寺宝光院小
さきよてて大内少輔がい体を又と大主に登と西井の力もげ方
の會あつてこそ今ハ小田の大軍を引取へてう合戦のびだと行財り
又く敷次よ退き切るに至り落城と又退陣の事を爲させば勇昌山修
長門主もひ翁よる味方意心の者教えど敵て降す諸方の城一時
又破き不づ陣中とてもほひうらど思ひ立て義京が年じよまうせ
今宵月の明きたる奈良陣を拂へて退くだると其日志風と定ふ
かひく義京が陣中強劫もるや大方かとび落城者をすく其夜



子の勢へぬ義系一族良役を引けし因祁山の陣を志すば諸軍戮一
先兵乘じ誠示して引退く山傍長門守曰小治即殿して柳ヶ瀬まで
退きる信長豫て体を察りし霄の向う陣觸ありて飼食勢引退
久追討より崩さんと間者を入れ候ふ事とへ飼食勢引ひどく相
て崩れ大なる信長走て馬を猛出一撃りんで追ひて北走と之を
後をさうか又へ軍兵追く馳走る信長大驚て續く者誰もならず
と間ひ猪ふよ紫團勝か佐久間信慶庭永秀明智光秀と言ふ信長
嘆て義系を討得へり今日の三戰より汝等は連日此の勇力すに
仰合ぞと云捨て馳引ひよ先よ一戦の軍勢我勝と進み仍信長走を
うけて左大臣もまた准てかうぞ言て曰く本ト名を即一憲政在清門
佐内義助福富至た清門戸因すた清門も本左吉陽清基助赤尾七
郎在清門もとやん信長とれを称して今霄の先陣汝も之進めく
と云色強ひ輕兵急み追ひて山根山よりあがへる飼食勢と追はば
く切捨つゝ中間と引田との別と路まで追ひ

飼食家勇臣等討記

敦賀へ通す至るありて爾中清門と引田との両君之信長の大軍は而て
て何きのる退きて人と見ゆてあらる小本下及び即諸軍に向ひ
てやるる飼食の軍卒多く中間を立るゝも義系を始とし家後の
まゝ引田の切不思足酒と防ぎ戦人と計ならば中間へ退りておれ
と云實よりて地勢引田只一文字にて息を切てぞ退てあらる山傍忍
門ちよすら小田勢の退走る所をくわ根坂の切不思足を食ふあらる義
系の氣なくてえさんと討記と定められ此日志の實和田三郎在清門はく

其二

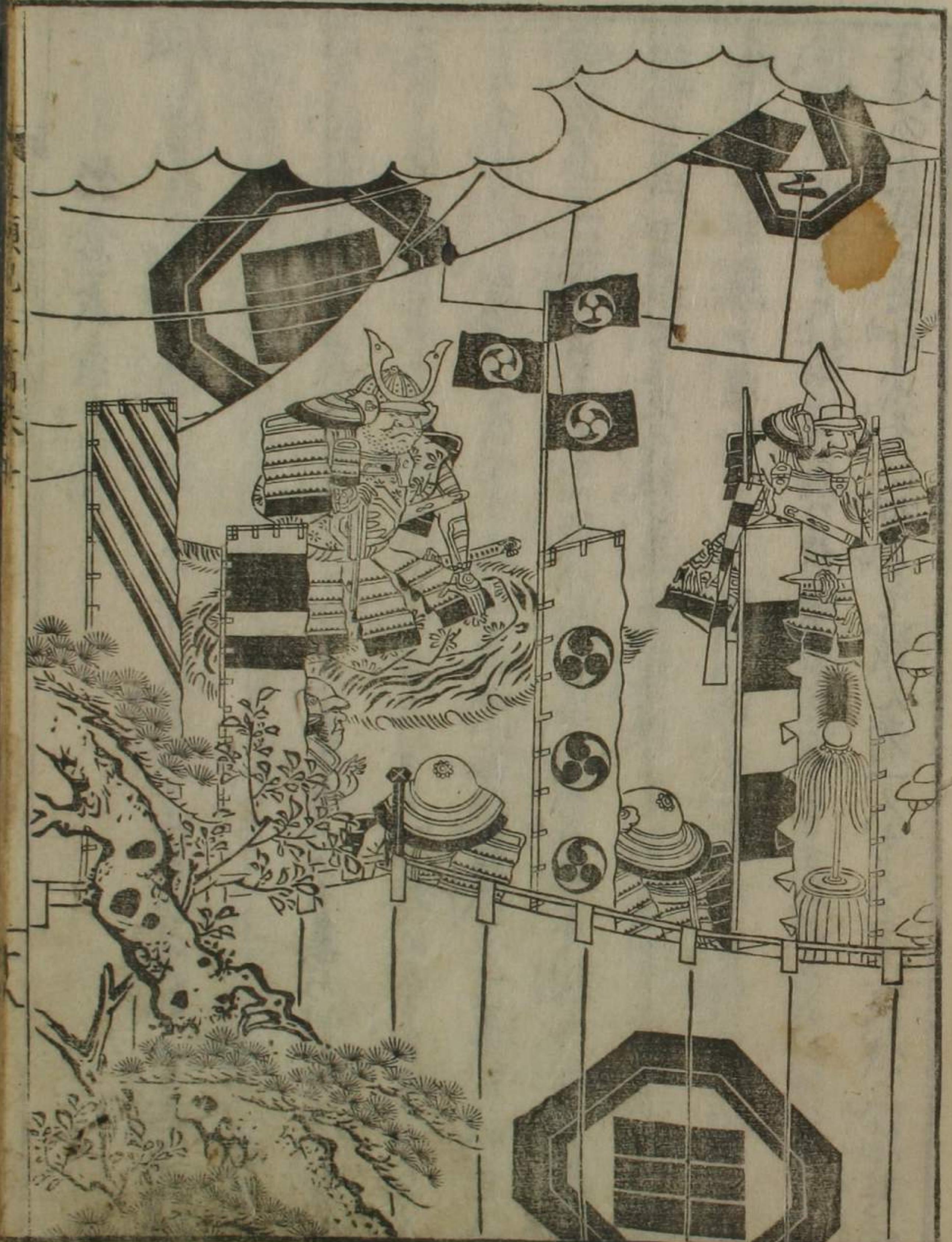


女
友
龍
真
討
記



うる詠がよふを圓ミ一人も争ヒとやゑて死レして擇アリテ表シヘ
鶴倉番代の勇士山勝を始ヒに一人も死フシく皆我軍ニ討ミタテ此時
本下氏家の兩ねり刀根山を弛ぬけ義系の旗幸ニ向近くぞ進付テ
鶴倉の勇兵等軍勢をさしめ候へをみて然ソんとて本下義右郎が自ら
槍斧を差先テ進んで敵よりしが加茂福源行切勝頑張極尾の別兵
どり我ゆき退ヒと敵ゆき延ヘテかゑる名教を知リて鶴倉方の名内
勇士乞がるゝ教多討記と寔ヨ敵及右兵湊を陣龍興今夏義系
が生陣ヨ遙ヨとけ不まぞ引キシテ鶴倉方の名譽の勇士悉く討記と
遂げ今ハ誠弟滅ヒと差シテ又は圓をのれしむつ所モ人ノ後指と指
きシや我討記の期ニと後兵優ヨ十餘人氏家た承亮が三百余騎乃
其中ヘ面もすば切て入る後左右に切られバ民あが軍兵とも歿及一人
惜ましくこそえりされ

又切立られ方に方びりとおもてうる龍興主後文ヨ退く心かくねり進ん
て鶴倉が其身金石をみざし教多の津を勵きぐく禮脱捨後擇切
そ死テうとう十余人の後兵も皆辰ちゞく死シテうそも勇ヒシテうろ
次第ニ本下氏家ヒヨク勇んで討テる後ヨ鶴倉の勇士鶴倉云佐
日掃部賤日掃部主是日彦仁即神並宮内構はた承之保固の監細
呂本治教捕長榜大糸坊等踏止つて討記一ノしげ際ヨ義系ハ辛
一テ一糸ヶ父迹ゆりぬ鶴倉家累代武勇の事けハ當附義系晴
鶴倉ヒトスドモ先代の遙古今にえせば急よ繁んで義を重ヒ忠義
にて屍を戰場の邊ヒとせまく教多ナリ而ノル義系成ニ
心を用ひて凡事ハ必ず良ねかうセば置一鶴一タヨ滅セさんやど
惜ましくこそえりされ



鈴倉義系玄期

叔り信長の軍勢勝み至りひと切々追討十日日の本懇と數が多の津
へ丸入ては戦ひ大概に忍大嶽の陣場より敵が今まで十一里の間一昼夜の
内計兵首數三万八百余級と記せり信長諸侯が集ら此勢ひよ厚
一豪ケ兵押考義系が斬る」と浅せらしテ小舟羽池田が歩進を出く
やうる御計を極て是れども鷹井長政小吉と籠城して軍勢ひ若よ
滅せば西園征代又日を累々兵火廢して西園の兵勢を討しよ味方の退
難後すに宜計を定め後の患えき飯服にてまかうと言ふ時よ
本下益吉即席を進んでやうる諸將の兵刀を以て之を係留矣にゆひて
心配のゆ段てこれは其先の長政勇とくとも又之監其が後輩等も
此後の合戦又英舞が多ひ押考て戦ん者一人もみづだれ我又豫其事

を爲て虎門木山よ竹中守兵湧尉重治をあてて忍大嶽丁壯の城よ
惣時孫平中村孫ま次を籠西竹中ざよをもうちり小吉の城と押
至りしが長政又は北綱程の魚籠平のを何ぞ思ひてかくしや一魁
も又一豪ケ兵押考義系が首を得て信長の愛慕よ叶ひ且其
功とさも勇ほしく語りしべ信長をはじめさせ諸君一統よけ候
口ド其の翌日敦賀を立て舟かにむく籠門きに奉陣を居らし義系
がありとまを仰せらる叔り鈴倉義系からみて一豪ケ兵にぬれせんと
つとも一族良俊宗後の勇士率て討死し小國の大軍を引ひて攻め戦ふ
至れりて武郡を廻るえ燒く居城大聖郎まの山にて落りて東雲寺
とある處に身を出じ役者をして平家寺の裏側をおきゆども其事
今ハ信長よ一時て結る歓對のを成らせば老鳥宿後も鈴倉三郎

系亂に孫三郎系健もも皆信長の降集し於こかくゆうさればとさ
へ勇きをくと義系の要き不なく恐れしゆき居ておなづけり
信長ゆく石しき山の山を夷討じとて爾系條豫へ道一徹歎を
先きに摂軍治に續て拥ある一徹歎計をみて式部吉浦系統を邊
義系を討く信長は降系せらゆひては眞ちの褒称あはる義寵
以て欲對せんとれやかく大軍一日よ押よせ夷渡さん又馬ともせ
者みそび恩讐を極め返言じとや送りられ原種不齒の勇を
とくも防禦叶ふとも是がしが忽心を慶じ平家寺の衆後を擡
て東雲寺成吉國もまくは義系を討て小田よ降集すうるは人
人つまほじて悪くする附よ義系乍一歳を

義婦 斷令而全操

船倉義京東雲寺すて討はれりが宗後の兵或ひ討はれり落多燒
服て信長は降るもあく七額ハ例誠末の殘勅大方ちへば左近太守の
妻族名み武士の妻妻兒女魚の水よ離はざるく東西よ走り南小よ將
び何處をらてともひて逃れど心き難い下駄ども奪ひて擡はれ
む其外圓中の妻妹老てるが助け初きを抱き泣きあはれも因も當
られぬ次第へやにも衰えうる故あうげなる妻房の年はまだ二十に少
羅一シテ妻女を雜兵七八人集うてをもとをもとをもとをもとをもとをも
とをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをも
邊の心よ既へ年せんよ我一言り叶てとぞ自らがまかきの力戰ひよ討罪
し給ひ母姉の怨恨えり付くに某の不仁と心あつれ方も付くがゆ
き一年の消息を母姉よ送り我身の事のを知らせあつてに義進はゆ



義婦命と
断く様を
拿入

をよく計りやうべ心ゆくて隨ひばん取やひかえ出立とては難兵
どもすがそを至るてゆきしき事納みづびつる手を拂くと受け止む
女将び何のうさらくとゆふそくせて送り度詔付どもほひを
うそ傍よみうる古井の中へ生達さまた身を投ド貝の殻と漬てうる難兵
ともあひてうら見井の邊起へと抱きよアラシとよと切立てせんとぐは
書袖へと消息をいきしれ餘の言葉へかく身

一世人経きばうかん雲も霞うへとつゝほしの陽日月

心うた難へども身を滅ぼ滅を縫して難の袖所濡れたり

信長大軍圍小谷城

志後城船倉本郷吉浦京燒へと義系が首を持て信長より降奉す附小
國の諸侯も京燒が不義不忠を要す前代例て法を正へとおとくにやる

を本下表を節制して信長云々言ヒソロリ武部を浦其罪其不義謀讐と
夷とぞつゞも情くそを窺へて味方の益より候へ居其要全く調へ
後謀討へ持ても速きのうづく其故つゝとうしが義系をび難を
一國君の御身に属とつゞも国人の心を得ど急よ難済とうず難うじ
こしを全く卒活せんと欲せば若此國は擇當ほしく三月乃至す年も國
中の住民は總ひの段万石紀へ殆どんが叶ひうだ然るよはれよ清井
長政ありてへまご卒宣せば若日がまの当國は第うだ難へ寔と
て両全の計略が業どあよ武部吉浦京燒を始て誠恭降奉のねたれ
く於地を占め此國守らを而君の軍勢を引けり度征伐へとおとくに其内
よ彼多坐に威を重ひ内裏をはく日本討ひ及ばし此國の發動を彼
讓り難よの多とよ迄て叔充も歟も罷をひ一途で両國全く卒宣と

今と云信長も伏せて此計を奇くし先本波丸即丘湧と桂田擴守と改名。系が谷の城主ヒ一園の住處を因じて山田翁六郎を肩中に立派で、もろに候後を名羽の城よ籠らせ溝に大坎を金津の城並に武郡を廻系後は故本のまゝの山の城を守らせる別明智十兵湧は四九節次即本下賜を湧門三人を因代として少の度よ陸西豫め一園の住處調ひしが日せ六日軍勢を引いて虎門前山の陣より移す極其勢いの長政とそんとて摂軍九万又餘誇小弓の敵を十乘せ重且元園を賄財え素面とぞ勢ひ之小弓の敵が構の大お三園村を湧門尉小郡本流浪者此大軍の勇者以ひ忽津争ておほく用き小園勢を引けりが本下小市郎竹中す兵湧軍を引て城中之陣を立長政が幸丸と久政が出丸との間を断切お敵より放ひしむ長政空す源く乞に迷惑

ひよく氣勢を高ひふサ八日の又五に信長やれて身をもつがせば
巖倉夷付徴塵のせんと探ざうれど久政今ひ義城叶ひぐく諸軍よ
命の歎を防セ心難よ生富て死する日久久政が憲を憂ひ松木ま
とく船師此附まで例よ付深居アシガ用斐／＼姿外漏其事りそこと
み援機切／＼と死しれひ龜城の勇士を因采安ひ古城あざ西山丹
た湧門を討て出く大主に威ひ一籌も持てば討死へけ構も居てうる
清井長政ひ又久政の立教を知て率をやめて方せんといふがや此
守を復者として城内ひま長政よや達へる事うの信長先よ妹を石
て呉やん嫁アム吳下のまゝ我擣之今日よもて縁起の晴さきにあくべ
述よ懸を用ひ澤糸ひてゆひく一家悉く助余とぞ長政



名不得一勇ねなしも人本石よしめしに國をものせうじにあす
時信長の嫁於市の方と小谷の方とやうて御方の後、一男三女ありてとおら
く生え子を近く抱き阿内守し向くヤマノリとおん信長の甥某
が生え子信長の娘の因をみて賄金候る衆生前引後の候び阿内守
よ志とや謹で令よ候ひ是今送り差し候てり又政毛賄金領
まは至京よゆひてり出嫁そ心よく生宴を遂ぐく同此有税候れ
う懸懸よ演られ多一河内守毛をみて即ち某不肖にひり
信長の役にて出嫁よもよかう美殿を生害せしら河の面目みて信長
み對面もうだにま及強よせ害候事なづが只今致り第ナセ君連姫
達をじ頼り切後候どしけ有信長ヤ入急崩の再執候とせ宴候
往で後と理よ當うたる云々をあひに人の四邊小谷の方を詠

駿逸て立出しが長政も理よ付一す害の御慰を延一夏掛ニシテ本
村小は即兩人を添く妻毛信長の陣(遙)らむ小谷の方へ途方に立
候よ滅々く叫びても敷かば長政の活食を信長よ飢へりとぞ心
のかうて侍女婢女よ助けられ外へこそ出らま

司馬文正公集

蘇東坡詩卷之三

九三

本治

